
夫の言い分 妻の言い分

今谷次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夫の言い分 妻の言い分

【Nコード】

N3696R

【作者名】

今谷次郎

【あらすじ】

もう我慢の限界だ。

今日俺は、妻に離婚届にサインしてもらおうと思う。

会社を出て十五分歩き、山手線で二十分揺られ、駅のホームで十分待ち、埼京線で八十五分の瞑想時間を経て、さらに地方ローカル線で四十分過ぎして、最後に三十分歩く事で、俺は自宅に到着した。多分俺は、一億人以上が住むこの国、日本でも、長い通勤時間の持ち主だと思う。

それは俺が決意を固めた理由の一つではある。だけど、小さな理由、取るに足らない理由でしかない。

鞆に目をやり、透視するがの如く、見えないはずの緑色の紙を見つめる。

俺は覚悟を決め、玄関の鍵を開け、ドアを開ける。チエーンがかかっていた。

こんな小さな事でも、瞬間湯沸かし器もビックリな速度で、瞬時に俺の怒りが頂点に達した。

ドアの小さな隙間から妻を怒鳴りつけそうになったが、こう言う時は、冷静な態度の方がスムーズに事が進むはずだ。

俺は気を落ち着かせた。

俺たち夫婦は、今日、離婚届にサインするのだから……。

俺が呼び鈴を押すと、出迎えに来た妻は、不機嫌そうだった。いつもこの態度だ。

「おかえりなさい」

妻が言った一言は、本当に一言だけで、俺の感情を逆なでするものだった。

飯が目当てのペットだつてもっと愛想良く出迎えてくれるはずだ、と思うのだが、それも俺が決意を固めた理由としては、小さな理由に過ぎない。

それから、俺は上着だけを脱ぎ、Yシャツとズボンのまま、食卓に座る。

隣の椅子には、離婚届が入っている鞆を置く。

妻は無言のまま、野菜炒めをレンジで暖め、無言のまま、乱暴に、野菜炒めをテーブルに落とすように置く。

数分前の俺に問いかける。

冷静でいるだって？ 無理だろ？

「おい！」

俺は怒鳴った。

だけど。

待つてましたと言わんばかりに、怒涛の文句が出たのは、妻の口からだつた。

「今日の野菜炒めは特別なの。なにせ、三十分も歩いて材料を買いに行ったのよ。ついでに高いお肉も使ったけど、それはどうだって良いよね」

妻のこの嫌味も、いつもの事だ。

「一番近いスーパーが、徒歩三十分もかかるなんて、素敵な場所よね。と言うか、この辺にスーパーは一つしかないのよ！ 酷い話だと思わない？」

五月蠅い。

「一番近いコンビニだつて徒歩十五分もかかるわ。と言うか、近所に一つしかないの！ この街には、遊ぶ場所もなければ、おしゃれな飲食店も無いよね」

五月蠅い！

妻のこれらの嫌味も、俺が決意を固める理由の一つでもある。

それは、大きめな割合を占めているのだが、決定打ではない。

「誰のせいで、こんな不便な街に住まなきゃいけないのかしら？ 嫌になっちゃう！」

これだ。

毎日聞かされる、この台詞。

これが、俺の決意を固めた、一番の理由なんだ。

確かに、俺の収入で、都内に一軒家を買うのは無理なんだ。

それはわかる。
だけど。

都内の2LDKのマンションじゃ嫌だ。絶対にマイホームが良い。
と駄々をこねたのは妻だ。

誰のせいだ、こんな生活を送るのだった？

お前のせいだろ。

女って生き物は、都合の悪い過去を忘れる生き物らしい。

腹立たしい。

「いい加減にしろ！」

俺は机を叩いた。野菜炒めの皿が、テーブルから落ちそうになる。
そんな事はどうだって良い。

「何よ！ 大きな声出さないでよ！ ドメスティックバイオレンス
よ！」

妻は叫ぶ。

女のヒステリックな悲鳴はドメスティックバイオレンス、つまり
は家庭内暴力にはならないのか？

それよりもだ。

妻の悲鳴と同時に、野菜炒めが空中散歩をしている事が、問題だ。
俺の晩御飯のおかずが、『食べ物』と言うステータスを失って
瞬間だった。

これこそ、ドメスティックバイオレンスだろ！

もう駄目だ。

我慢できない。

話し合いをする必要も無い。

俺は立ち上がり。

「誰のせいだった？ お前のせいだろ！ 俺は何度も反対したぞ。
それでも、将来ペットが欲しいだの、将来の子供のためだの……
どうしても、不便でも、一軒家が欲しいと言ったのは、お前じゃな
いか？」

この家に住み初めてから、今日まで一度として、口に出さなかつ

た不満を、妻にぶつけた。そして。

「もう、俺たちは終わりだ」

俺は離婚届を鞆から取り出し、机に置いた。

しかし。

妻が離婚届を見ることはなかった。

先ほど皿を投げた妻は、地べたに座り泣き崩れている。

「だってえ〜。あなたとの時間が減るのが、こんなに辛いとは思わなかった。あなたに会えないのが辛いよ。だから、いつもイライラするの……。抑えきれないの……。ゴメンなさい……。ゴメンね」
女と言う生き物は、物事を理論的に考える事ができないのか？

いつだって、感情で物事を考え、判断し、行動する。

質問の答えだって、感情論で答える。

しかもワガママだ。

実に許しがたい。

理解に苦しむ。

同じ人間とは思えない。

そして、なんて可愛い生き物なんだよ！

俺は破れるのも、しわくちやになるのも、気にせずに、乱暴に離婚届を鞆にしまった。

そして、何も言わずに妻を抱きしめた。

「と言う事があつたんですよ〜」

私は昨日の夫との喧嘩を、近所の奥様たちに報告する。

夫は知らない。週に五日、十四時から十六時に開かれている、奥様サミットの存在を。

「それで、解決しちゃったわけ？ 本当に男って単純よね〜」

そう言つて、鈴木さんはティーカップを口に運ぶ。

夫は知らない。そのティーカップの中身が、一杯が三百円の、高

級ティーパックから作られている事を。

「男は現実を見る力が足りないのよ！ 夢の中に住む、愚かな生き物よね」。私の夫も、先月に、今まで楽器に触った事すらないのに、『ミュージシャンを目指す』なんてギターを買ってきたのよ！ 毎晩五月蠅くてしょうがないわ……」

そう言つて、田中さんはクッキーを一つ食べる。

夫は知らない。そのクッキーが一箱千六百円もする事を。

「やっぱり、『亭主元気で留守が良い』よね」

夫は知らない。このサミットでは、佐藤さんのこの台詞が必ず出ることを。

それでも、夫は知ってしまった。

私たちの本当の気持ち、私たちの後悔を。

素直になれなくてゴメンなさい。

いつもお疲れ様です！

この時は、誰も言葉に出さなかったけど……。

この日を境に、私たちのサミットは、月間予算を大幅に縮小する事になった。

それでも、夫の小遣いが増える事は無い。

男と言う生き物は、少なくとも私の夫は、貯金とは無縁の生き物なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3696r/>

夫の言い分 妻の言い分

2011年3月5日23時10分発行